

E.H.エリクソンの人生とアイデンティティ理論

中 野 明 徳

【要 旨】

エリクソンの人生は実父を求め続け、「自分とは何者か」というアイデンティティを問わざるを得なかった。彼自身、青年期にモラトリアムを経験したが、精神分析家になることによって同一性危機を乗り越えた。エリクソンは一貫して自我の発達に関心があり、『幼児期と社会』で心理社会的な発達とライフサイクル論を呈示し、『青年ルター』でサイコヒストリー（心理歴史的方法）によって否定的同一性を扱い、さらに『ガンディーの真理』では生殖性（世代継承性）を論じた。

【キーワード】

アイデンティティ、ライフサイクル、サイコヒストリー、否定的同一性、生殖性（世代継承性）

I. はじめに

エリク・ホンブルガー・エリクソン (Erik Homburger Erikson, 1902-1994) は、ライフサイクル論やアイデンティティ概念を提出した精神分析家として、心理学や社会学の学界で非常に有名である。エリクソンは実父を知らないという問題を抱え、幾多の危機を乗り越えなければならなかった。本論は、エリクソンのアイデンティティ理論が彼の人生と深く結びついていることを示し、どのようにしてこの理論が生み出され、ライフサイクル論に発展していったのかを明らかにしようとするものである。特にエリクソンの三部作とでもいえる、『幼児期と社会』『青年ルター』『ガンディーの真理』を総覧して、彼の精神分析理論を検討する。

II. 「エリク・ホンブルガー・エリクソン」になるまで

フリードマン (Friedman, 1999) による詳細な伝記『エリクソンの人生』から、「エリク・ホンブルガー・エリクソン」になるまでを素描してみよう。(以下、下線は筆者による。)

1. 子ども時代

エリクの母カーラ・アブラハムセン (Karla Abrahamsen) はコペンハーゲンのユダヤ人社会の名家の生まれで、アブラハムセン家は17世紀の北ドイツにさかのぼる古い商人の一族であった。カーラは21歳 (1899) のとき、6歳上のユダヤ人ヴァルデマール・イシドール・サロモンセン (Valdemar Isidor Salomonsen) と結婚したが、夫は婚礼の夜に姿を消し、二度とカーラの前に姿を現すことはなかった。カーラはその後も夫の姓を使い、4年後の1902年6月15日にエリクが生まれたが、出生証明書には父親の名前が記された。1902年10月にヴァルデマールは外

国で客死したが、エリクは法律적으로는嫡出子である。カーラはフランクフルトで出産し、エリク・サロモンセンを育てたが、エリクの実父が誰かは最後まで明かさなかった。アブラハムセン一族の間では、エリクの父親はコペンハーゲン裁判所の法廷写真家で、カーラはエリクに父親と同じ名前を付けたのだという噂が長く伝わっていた。母親は黒髪であるが、エリクはブロンドの髪と青い眼をもつ色白の子どもであった。

エリクは病弱な子どもで、特に胃腸が弱かった。エリクを診た小児科医がテオドル・ホンブルガー (Theodor Homburger) で、カーラよりも9歳上の小柄な男であった。1905年、二人はエリクの3歳の誕生日の6月15日に結婚式を挙げ、ハネムーンにもエリクを伴った。ホンブルガーは未婚の母カーラを救済した男であり、カールスルーエのユダヤ人社会で有名な旧家一族の出身であった。テオドルとカーラの最初の子はエルナ (1907年生まれ) であったが2歳で死亡、1909年にルース (Ruth Hirsch)、1912年にエレン (Ellen Katz) が生まれ、エリクには2人の妹がいた。カーラとテオドルは、エリクに対して完全に実の両親として振舞おうとした。エリクの姓がホンブルガーとなったのは、両親の結婚から3年後の1908年であったが、法律上は1911年からであった。エリクは、背が低くて黒い眼と黒髪の養父と違って、ユダヤ教会から距離を保とうとした。エリクにとって、養父が彼の芸術への関心をほとんどわかってくれず、医者になることを要求することにも耐え難かった。

エリクの父親探索の跡をたどると、3歳の時はテオドルが実の父親だと教えられたが、エリクの本当の父親は非ユダヤ教徒の芸術家だと盗み聞きした。第2段階は8歳から14歳までで、母親がエリクの実の父親はサロモンセンだと教えた。第3段階の青年期では、新しい噂を耳にして、父親は才能豊かなデンマークの貴族でキリスト教徒らしいと徐々に気づくようになったが、母はエリクに実父の問題を追求して欲しくないと思っていた。エリクにとって、自分の父親は誰かという問題はエリクの人生にとって最初の大きな危機であったが、しだいに養子であることからアイデンティティを作るほかはないと感じるようになり、自分の宗教は何か、自分は何国人なのかを突き詰めて考えるようになった。

エリクは、6歳でカールスルーエの小学校に入学し、9歳で卒業した。その後、9歳から18歳まではカールスルーエ・ギムナジウムに通った。この同級生に、アメリカの精神分析界で有名になったピーター・ブロス (Peter Blos) がいた。エリクとピーターは、たびたび散策に出かけ、哲学、芸術、自然を好むという関係で互いに引き合う仲であった。ピーターの母親はユダヤ人であったが、父親はキリスト教徒であった。エリクとピーターの父親はともに医者であったが、二人とも医者にならなかった。ピーターの父、エドウィン・ブロス (Edwin Blos) は興味の幅が広く、ガンディーという世界史の重要人物について、エリクの知識を広げた。

ギムナジウムを卒業後、エリクはシュヴァルツヴァルトを徒歩旅行して過ごし、1921年、大学に行かずにカールスルーエのバーデン州立芸術学校に入学した。カールスルーエのユダヤ人社会では芸術の評価は低かったが、エリクは養父の望む医学の道と訣別した。その頃、小さな学校を開いていたグスタフ・ヴォルフ (Gustav Wolf) と知り合い、スケッチ、レタリング、木版画を学んだ。カールスルーエで息苦しさ募っていたエリクは、ヴォルフの勧めもあり、1922年 (20歳) にミュンヘンに向けて旅立った。ミュンヘンで2年近く過ごし、芸術アカデミーに入学して芸術技法を学んだ。エリクは芸術学校や芸術アカデミーで学んだ時期を含めて、1927年までの放浪と内省の時期を「遍歴時代」(Wanderschaft) と位置づけている。当時のエリクは「心理社会的モラトリアム」(psychosocial moratorium) のさなかにあり、専門用語を使えば、「神経症と精神病の境界線上にある境界例」だった。

2. ウィーン時代

1927年、ピーター・ブロスがフロイトのいるウィーンにエリクを呼び寄せた。ウィーン大学に入ったブロスは、ドロシー・バーリングガム (Dorothy Burlingham) の4人の子どものための家庭教師となっていた。バーリングガムはアメリカの富豪ティファニー家の一人で、当時ジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) から精神分析を受けていた。ジグムントの娘アンナ・フロイト (Anna Freud, 1895-1982) が子どもたちの分析を担当していた。バーリングガムとアンナは精神分析を受けている親に連れられてくる子どものために学校をつくることになり、ブロスは1人では無理なので、エリクを推薦した。バーリングガム家の子どもたちはエリクの描くスケッチが気に入った。エリクはフロイトの娘がどういう人かも知らず、自分が何をしたいのかもわからずに面接を受けた。エリクの初めての仕事は、フロイト派精神分析家の間で非常に重要な学校の教師の職であった。

エリクのウィーン到着の頃は、カール・ユング (Carl Jung) やアルフレート・アドラー (Alfred Adler) を始め、多数の精神分析家がジグムント・フロイトから離れ、フロイト自身は病み、国内外の精神分析界での責任の多くは娘のアンナが肩代わりをしていた。アンナはエリクの師であり、スーパーバイザーであった。新しい学校はウィーン市のヒーツィング (Hietzing) 地区にあり、フロイトのよき友人であったエヴァ・ローゼンフェルト (Eva Rosenfeld) の巨大な庭に建設された。エリクとピーターは、革新的な教育プログラムを広く取り入れた。アンナは分析者、分析を受ける子ども、子どもの親という三者のパートナーシップを強化したいと考えていた。生徒は学校が存続していた5年弱の期間中、平均して16人の生徒 (8～15歳) が在籍した。アウグスト・アイヒホルン (August Aichhorn) やエルンスト・ジンメル (Ernest Simmel) といったヨーロッパの著名な分析家の子どももヒーツィング学校に通った。子どもたちの約70%が主としてアンナの分析を受けた。ブロスは校長として、地理と自然科学を教え、エリクは人文科学 (美術、歴史、ドイツ文学) を担当した。1929年ジョアン・サーソン (Joan Serson) に紹介されたエリクは、もはや遍歴青年ではなかった。ブロスとエリクの教育方針は強迫からの解放で、二人は授業計画を立てず、生徒たちがしたいことに任せていた。そのためにバーリングガムの子どもたちは、公立学校にうまく適応できなかったといわれ、この学校は1932年に閉鎖された。

エリクはヒーツィング学校での定職によりウィーン精神分析界での居場所を得た。彼はアンナ・フロイトの指導により、精神分析、心理学、社会福祉サービス施設で活動するようになった。エリクはモンテッソーリの教師養成コースにも通い、教師免許も得た (1932年)。精神分析の訓練を通じて、エリクは子ども時代の経験の深い象徴的な意味が夢に現れたり、言葉の中に漏れ出たりする現象を理解した。1929年から1933年にかけて、エリクは何度もウィーン大学の受講生になり、47単位を取得したが、正規の大学生になれなかったのは、彼には具体的な目標がなかったからである。ウィーン時代のエリクには、大学よりも精神分析家になることが重要で、アンナから児童分析家としての訓練を受けるが、精神分析のような知的な仕事が適職かどうか疑問に感じた。視覚的な要素を重視する考え方が精神分析という職業の中で受け入れられるのか、自分の芸術的性向が入り込む余地があるのかという不安があったが、子どもたちの見方を助けることができ、それを通じて精神分析に貢献できることを教えられた。ウィーン精神分析研究所でエリクの指導者の一人であったエルンスト・クリス (Ernst Kris) がウィーン美術館の館長という経歴をもっていることも勇気づけられ、エリクは子どもの遊びの重要性を理解した。

1929年、エリクはアンナ・フロイトから教育分析を受け始めた (3年半から4年続いた)。分析の最大の難所は父親の不在という問題であった。ヘレーネ・ドイッチュ (Helene Deutsch)、エドワード・ビブリング (Edward Bibring) がスーパーバイザーとなり、やがてハインツ・ハ

ルトマン (Heinz Hartmann) とポール・フェダーン (Paul Federn) が指導に加わり、自我の機能を重視した理論 (自我心理学) を教授し、エリクの世界精神分析学は広がった。

エリクの分析は、ジョアン・サーソン (Joan Serson) の登場によって変容した。ジョアンは、1903年にカナダ・オンタリオ州ガノーク町で生まれ、生まれた時の名前はサラ (Sarah) といった。父ジョン (John) はカナダ生まれ、監督協会派の牧師であった。母メアリー (Mary) はニューヨーク生まれのアメリカ人で、生家のマクドナルド家は非常に裕福であった。ジョンとメアリーは最初から冷たく、母は幼い子ども (娘2人、息子1人) を連れて、しばしばヨーロッパ旅行をしていた。父は末子のジョアンよりも姉のモリー (Molly) がお気に入り、ジョアンは父親から拒絶されたと感じ、母親は冷淡、不安定で、甘えたりすることができないと感じていた。ジョアンが2歳の時、母はうつ病で長期入院し、祖母ナーマ (Nama) がジョアンの世話をした。ジョアンが8歳の時に父が死亡し、母は友人のいるニュー・ジャージー州トレントンに移ったが、ジョアンは祖母とガノークに残った。ジョアンは両親に対して怒りの感情を抱き、できるだけ早く家を離れたいと考えようになった。

ジョアンはバーナード大学で教育学の学士号、ペンシルバニア大学で社会学の修士号を得た。コロンビア大学の教育学大学院で博士号の取得を目指し、現代舞踊の教授法をテーマに学位論文を書き始めた。母がボストンの監督協会派の女子修道院に入った時、ジョアンはヨーロッパで研究を進めようとした。ジョアンは大胆でエネルギッシュであり、ベルリンで研究を続けた。1929年、26歳になったジョアンは研究範囲を広げるために、ウィーンのヒーツィング学校を訪れ、体育と英語の教師として面接を受けた。その後まもなく、ジョアンはエリクがピーターと共同で借りていた部屋に移った。1930年、ジョアンは身ごもったが、エリクは非ユダヤ人と結婚することに自分の両親が賛成しないのではないかと恐れ、結婚に躊躇した。友人たちが、父親が犯した同じ過ちを息子が繰り返すべきでないとエリクを説得した。エリクの人生にとって、2度目の大きな危機であった。

数か月後、エリクとジョアンの長男カイ・テオドール (Kai Theodor) が生まれた。カイという名前はスカンジナビアにルーツをもつ。エリクが結婚に同意したので、1930年の後半、宗教上の違いから3つの結婚式が行われた。1933年に次男ジョン・マクドナルド (Jon MacDonald) が生まれた。ジョアンは博士論文をあきらめ、二人の息子をクリスチャンとして育てた。ジョアンも精神分析を受けた経験があり、フロイトの初期の弟子ルートヴィヒ・イェーケルス (Ludwig Jekels) から毎日分析を受けたが、精神分析に一貫した興味を持っていたわけではなく、数か月でやめた。ジョアンはアンナによるエリクの毎日分析も重要だと考えなかった。アンナが夫のエリクに大きな影響力をもつように思われることにやきもきした。エリクのなかでもジョアンへの信頼が大きくなり、アンナとの分析の重要性が薄れていった。

エリクの最初期の論文に「学校作文における衝動の運命」(1931)があり、正統的なフロイト派の方法によって、生徒の作文にある「生き生きとさせる衝動」や「自我防衛」について論じている。しかし、自我とイドの相互作用については、フロイト正統派の考えよりも、「言語的であると同時に視覚的なコンフィギュレーション」と呼ぶ考え方に立って考察している。鑑 (2018)によれば、コンフィギュレーション (configurations) とは、ゲシュタルト心理学でいう「ゲシュタルト」に近いもので、要素が一つのまとまった時に、違った構造に見えることである。エリクは機械的な自我-イド構造の視点ではなく、コンフィギュレーション理論によって、「無意識そのものの創造力」を明らかにしようとした。ここにエリクの芸術家的な視点がみられる。エリクの論文は、子どもたちがおもちゃで作るもの、絵で描き出すもの、口に出した言葉に注目したもので、アンナのライバルであったメラニー・クライン (Melanie Klein, 1882 - 1960) の考えに近く、

典型的なアンナ・フロイト派の児童分析とはみなされなかった。エリクはフロイトの理論を支持する一方で、それまでの精神分析にはなかった、おとなと子どもの間の具象的で特定の個人的な情動的絆に注意を向けた。つまり、二つの世代間の特殊な繋がりを人間存在にとって不可欠で重要なものだと考えた。アンナ・フロイトの自我の防衛の理論に対して、エリクは自我そのものの記述がないという不満を抱き、彼の関心は自我を成長させるものが何か、であった。

1933年、エリクはウィーン精神分析協会の正会員に選ばれ、自動的に国際精神分析協会の会員資格が与えられた。つまり、世界中どこでも開業できるのである。ジョアンはドイツ国籍を取り、二人の息子もドイツ人として生まれた。ナチスの運動が高まり、ジョアンはエリクをアンナ・フロイトのサークルから離したいという気持ちが強かった。エリクは6年間訓練を積んでもまだ安泰ではなく、ウィーンから離れることにアンビバレントであった。アンナは児童分析の将来のためにエリクが必要だと言ったが、エリクは自分のやり方で児童分析を前進させたいと応答し、1933年、一家4人でコペンハーゲンに向けてウィーンを離れた。長年の友人だったピーター・ブロスは、アンナ・フロイトがエリクだけを教育分析したことで、二人の仲にひびが入り、キャリアの面でエリクから大きく離されたと感じて、ウィーンを離れていた。

3. アメリカ時代

エリクはコペンハーゲンで実父の身元を調べたが、ほとんど何もわからなかった。デンマークでは精神分析家はいかがわしい偽医者とみなされ、エリクは6か月の短期滞在しか許可されず、有給の職を探すことも認められなかった。デンマークの市民権を取り戻すことができず、ジョアンはアメリカへの移住を強く主張した。メアリー・サーソンは、家族4人のために移住ビザを取得した。ジョアンは30代の初め、カイは2歳、ジョンは8カ月であった。エリクは英語を話すことの不安があったが、実父をアメリカで見つけられるかもしれないという希望もあった。

1933年秋、一家はアメリカに到着した。エリクは国際精神分析学会副会長エイブラハム・ブリル (Abraham Brill) のニューヨークの事務所に赴いて、ニューヨークかボストンで開業するのに手を貸してほしいと頼んだが、ブリルは見下すような態度をとり、セントルイスなど患者があまり多くない辺鄙な場所を勧めた。この時期、エリクはみじめに感じ、それは「アイデンティティの危機」と呼ぶことになる不安定な感覚であった。移民の場合、この危機はずっと後まで続くことがあり、エリクはアメリカで頻繁に引越しをした。(ちなみに、エリクはウィーンの6年間に9回住まいを変えている。)

一家はニューヨークからボストンに移ることになった。ジョアンの母親が住まいの手配をし、エリクが職に就くまで金銭的な援助をしてくれた。エリクはボストン地域で初めての児童分析家として開業したが、あらゆる年齢の患者たちを受け入れた。エリクの名声はボストン精神分析協会の重要な会員であるジョン・テイラー (John Taylor) の妹、失読症をもつマーサ・テイラー (Martha Taylor) の治療に成功したことから始まった。当時のアメリカ精神分析学会は、正会員となるためには医学の学位を必要とする条件をつくっていたが、エリクはボストン精神分析協会の正会員となった。ボストンでの3年間に、エリクは個人開業の精神分析家以外に、マサチューセッツ総合病院の精神科研究員、ハーバード心理クリニックの准研究員なども務めた。ハーバード心理クリニックの責任者はTAT (主題統覚検査) の開発者であるヘンリー・マレー (Henry Murray) で、エリクは2年在籍した (1934 - 36年) が、エリクはあまりにも心理検査法を知らなかったので、積み木やおもちゃを使った実験をした。エリクは、発生学に基礎を置くマレーの漸成的 (epigenetic) な発達モデルに関わることもできた。一時はハーバード大学心理学部の大学院生となったが、実証的実験につまずき、博士号は取れなかった。

1936年夏、エリクはコネチカット州ニューヘイブンにあるイエール大学に移ることになった。ここにはアーノルド・ゲゼル (Arnold Gesell) の児童発達クリニックがあったが、1年も経たないうちに関係がうまくいかなかった。ゲゼルは、子どもの年齢に基づいた分類図式に心を奪われ、環境の要因よりも遺伝的な素質を重視していた。1937年、エリクは『季刊精神分析』に論文「遊びにおけるコンフィギュレーション」を英語で発表しており、この図は身体の8つの「性感部位」で構成される縦軸と、6つの衝動で構成されている横軸から成り立つ。これは『幼児期と社会』(1950)で発表される、ライフサイクルのチャートの原型である。おとなが言葉で伝えるように、子どもは空間的コンフィギュレーション (おもちゃや積み木) によって心理学的データを伝えることを述べた。エリクの英語は妻の支えもあり、驚くほど上達した

イエール大学の別の場所で、エリクは文化人類学者エドワード・サピア (Edward Sapir) に出会った。サピアは文化人類学と精神分析学の共存可能性についてエリクの目を開かせた。1937年、ハーバード心理学研究所で知り合いになったスカダー・メキール (Scudder Mekeel) が、サウスダコダ州パイン・リッジ特別保留地内のスー族の土地で開かれる夏季特別研究に誘ってくれた。エリクは伝統的なスー族の子育てに深く心を動かされ、伝統的な精神分析の観点にそれほどとられなくなった。マーガレット・ミード (Margaret Mead) やルース・ベネディクト (Ruth Benedict) にも出会い、『幼児期と社会』の基本概念が定まってきた。エリクは文化とパーソナリティ運動の人々が主催する研究会に出席するようになったが、メンバーの一人にピーター・ブロスがいた。

カールスルーエのホンブルガー家は、パレスチナ (両親と下の妹エレン) とアメリカ (エリクと年上の妹ルース) に分かれた。エリクにとって、アメリカが自分の選んだ国であり、ジョアンもアメリカを自分の故郷と考えていた。1938年秋、ニューヘイブンからカリフォルニアに移る前に、エリクはコネチカット地方裁判所に帰化を申請した。サンフランシスコに移ってから数か月後、1939年9月、エリクは、職業「心理学者」、人種「スカンジナビア人」、姓名「エリク・ホンブルガー・エリクソン」として市民権を求めた。エリクはユダヤ系の名前をアメリカ風に変えた。北欧では父親の名の後に「ソン (son=息子)」を付ける風習があった。カイとジョンにとっては、まさに「エリクソン」であるが、エリクにとっても北欧系のエリクの息子にした。つまり、エリクは自分を生み出した父親を創造したのである。これにより、父を知らないという「アイデンティティの危機」を脱出して、自分の人生を自分で責任をもつ人生が開始された。

表. E.H.エリクソンの年譜

西暦	歳	出来事
1902	0	6月15日、ドイツ・フランクフルトでエリク・ヴァルデマールとして出生
1905	3	6月15日、母カーラはテオドール・ホンブルガーと再婚
1908	6	エリク・ホンブルガーに改姓 (法律上は1911年から)、小学校入学 (-9歳)
1911	9	カールスルーエ・ギムナジウム入学 (-18歳)
1921	19	カールスルーエのバーデン州立芸術学校に入学
1922	20	ミュンヘンに旅立つ、その後フランス、イタリアなど遍歴
1927	25	ピーター・ブロスがエリクをウィーンのプロイト家に招く、ヒーツィング学校で教師となる <ウィーン時代>
1929	27	アンナ・フロイトから教育分析を受ける、ジョアンがヒーツィング学校で教師
1930	28	ジョアンと結婚、長男カイが生まれる

西暦	歳	出来事
1931	29	最初期の論文「学校作文における衝動の運命」発表
1932	30	ヒーティング学校閉鎖
1933	31	ウィーン精神分析協会の正会員になる、次男ジョンが生まれる、コペンハーゲンに向けてウィーンを離れる アメリカ合衆国に移住 <アメリカ時代> ニューヨークからボストンへ
1934	32	ハーバード心理クリニックの准研究員（-36年）
1936	34	イエール大学に移る
1937	35	「遊びにおけるコンフィギュレーション」、「スー族の教育に関する考察」発表
1939	37	サンフランシスコに移る、エリク・ホンブルガー・エリクソンと改姓してアメリカ市民となる
1942	40	「ヒトラーのイメージとドイツ青年」発表
1943	41	「ユーロク族に関する考察—子ども時代と世界のイメージ」発表、マウント・シオン病院復員兵社会復帰クリニックのメンバー、「自我の発達と歴史的变化」発表
1944	42	ダウン症のニールが生まれる
1949	47	カリフォルニア大学バークレー校の教授、養父テオドールの死
1950	48	教授職を辞める、『幼児期と社会』出版、サンフランシスコ精神分析協会の会長
1951	49	マサチューセッツ州オースティン・リッグス・センターに移る（-73年）
1958	56	『青年ルター』出版
1959	57	『自我同一性』出版
1960	58	母カラの死（84歳）、ハーバード大学特別教授（-70年）
1964	62	『洞察と責任』出版
1968	66	『アイデンティティ：青年と危機』出版
1969	67	『ガンディーの心理』出版
1970	68	ハーバード大学をやめて、ストックブリッジに移る
1973	71	カリフォルニア州ティブロンに移る
1974	72	『歴史のなかのアイデンティティー—ジェファソンと現代』出版
1977	75	『玩具と理性』出版
1982	76	『ライフサイクル、その完結』出版、アンナ・フロイト逝去
1986	80	『老年期—生き生きしたかわりあい』出版
1987	81	マサチューセッツ州ケンブリッジに引越
1994	91	5月12日生涯を閉じる
1997		8月3日ジョアン逝去

Ⅲ. 幼児期と社会（1950）

『幼児期と社会』を構成する論文は、主に1940年代にカリフォルニアで書かれた。バークレーの児童福祉研究所には、子どもたちの生活の変化を長期にわたって追跡する研究プロジェクトがあった。1939年1月、カリフォルニア大学評議会はエリクソンを研究員兼講師に任命したことから、一家はニューヘイブンからバークレーに移った。しかし、エリクソンは組織的な研究には

向かず、一匹狼的存在であった。他方、精神分析の仕事が成功し、エリクソンは医師免許を持たなかったが、サンフランシスコの協会が歓迎してくれ、1942年は正規の訓練分析家に指名され、1950年には会長まで務めた。ところがエリクソンは正統派の精神分析から離れ始めたことから、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) に対してと同様に、個人の発達における社会と文化の重要性を強調している「文化主義者」(culturalist) と非難された。1944年、41歳のジョアンはニール (Neil) を出産したが、ダウン症のために特別施設に移され、夫婦間に大きな緊張を生んだ。これはエリクソンにとって第3の危機で、ライフサイクル論に大きな影響を与えた。

エリクソンは本書の初版のまえがきで、「本書は精神分析家としての臨床経験から生まれた。主な章は、幼児の不安、アメリカ・インディアン族の無感動さ、帰還兵の精神的混乱、ナチの青年たちの傲慢さなど、分析家の解釈や矯正を必要とした特別な状況に基づいている。これらの状況にはいずれも精神分析的方法によって精神的葛藤を見出すのである」と述べる。エリクソンの研究は組織的なプロジェクトとは異なり、臨床的な精神分析の視点に基礎を置く。今日の精神分析学では自我の研究は不可欠であるとし、自我を「人間の経験や活動を環境に適應する行動に統合する能力を意味する概念」と定義し、「本書は自我が社会と結ぶ関係についての精神分析学の書である」という。

本書は4部構成からなり、第1部の第1章は、てんかんのような発作を起こす3歳の男子サムと、海兵隊員の戦闘危機が扱われている。エリクソンは、1943年にサンフランシスコのマウント・シオン病院復員兵復帰クリニックのメンバーに加わっており、戦争神経症の人たちに、同一性の意識が失われていることに印象づけられる。同一性の感覚について、「自己を、一貫して同じ自分であるという連続性と斉一性のある存在として経験し、またそのように行動する能力を準備すること」と定義する。サムと海兵隊員のいずれの場合、有機体内の変化(疲労と発熱)、自我の変化(自我同一性の崩壊)、環境の変化(集団恐慌)の総和が悪化しあう方向に働くと、防衛力を弱め、その結果として崩壊が生じるとした。

第2章は「幼児性欲理論」で、エリクソンは粗相を繰り返す4歳の女児子アンと排便を拒むピーターの例を出しながら、古典的なりビドー(性的エネルギー)の発達段階、身体部位と様式(mode)及び様態(modality)を扱う。器官様式は器官のもつ特有な機能のことであり、口唇であれば、取り入れる機能をもつ。社会的様態とは器官様式が環境との相互作用によって生み出す社会文化的な行動様式である。フロイトは、リビドーの変化を解明して人生周期(life cycle)を描き、性活動が段階を経て現れるという漸成的(epigenetic)発達として捉えたという。エリクソンは、前性器期について、「性器性欲のためにのみ存在するのではなく、成長する個体が特定の育児様式との出会いの中で、リビドーの興味がそれに吸収され、個体の生得的な接近の仕方をその文化の社会的様態に適合するように変形させるところにある」と考えた。

第2部では、児童のしつけに関して、サウス・ダコタ州のスー族(ダコタ族とも呼ばれる)と、太平洋岸のユーロク族が比較される。第3章の「大草原をゆく狩人たち」でスー族を扱う。スー族は好戦的な遊牧民であり、平原地帯で野牛狩りを生業としたが、1890年までに合衆国の支配下に置かれた。野牛狩りを失ったスー族は、徐々に集団同一性を形成する基礎を否定され、個人が社会的存在として心的能力を発達させるために必要な集団の統合の源を失った。ダコタ族の幼児期は貧困であっても比較的豊かで自発的な生活があるが、思春期になると無感動で、何事にも参加しなくなる。

第4章の「鮭のくる河に沿って住む漁民」でユーロク族を扱う。ユーロク族は太平洋沿岸で漁労とどんぐり採集を生業とし、クラマス河口沿岸に住んでいる。ユーロク族は「清潔」な生活を言うが、スー族のように「強い」生活は口にしない。魚の堰造りの行事は最も重要な儀式で、スー

族の「太陽の踊り」に匹敵する。スー族は野牛の消滅と共に経済的、精神的生活の中心を失ったが、ユーロク族は今日でも鮭を捕らえ、食べ、鮭を語る。ユーロク族は白人を歓迎せず、この未開社会を捨てることはない。

第3部は臨床事例が扱われる。第5章は「幼児期における自我の崩壊」で、臨床家によって小児統合失調症と診断された6歳の女兒ジーンの症例が紹介されている。エリクソンは不十分な自我をもつ患者を研究することで健康な自我の機能についての理解を深めることができるという。エリクソンの努力にもかかわらず、ジーンは確固たる同一性の感覚を身につけることができなかった。これ以降、エリクソンは健全な子どもたちに目を向けるようになったといわれる。

第6章「玩具と理性」では、夢と同じように、「遊びは幼児の自我を統合しようとする努力を理解する王道である」として、「遊戯療法」の事例が論じられる。子どもの遊びについて、「遊びは自我の機能であり、身体的、社会的作用と自己とを同調させる努力に他ならない」「ある事態のひな型を創造することによって経験を処理し、また実験し計画することによって現実を支配するという人間の能力の幼児的表現形式である」と提唱する。永続的な自我同一性は、「最初の口唇期の信頼がなければ存在し始めることはできず、成人期の支配的イメージから乳児期の初期にまで人間のライフサイクルの中に占める同一性の位置を確認しなければならない」という。

第7章は「人間の8つの発達段階」である。エリクソンは、自我は相反する対立を包含することで成長すると考え、各々の段階に発達課題を示した。

第1段階は「基本的信頼」(basic trust) 対「不信」(mistrust) の時期で、乳児が母親の不在を受け入れられるようになることである。それは、母親が予測できる外的存在になったばかりでなく、内的な確実性をもつようになったからで、このような経験の一貫性、連続性、斉一性が自我同一性の基本的感覚を準備する。「信頼」は自信と一致するが、相互的な感じが含まれる。

第2段階は「自律」(autonomy) 対「恥、疑惑」(shame, doubt) の時期で、筋肉の成熟によって、保持するか手放すという二組の社会的様態を経験する。自由に選択して自律を徐々に正しく導かれて経験をすることを否定されると、恥(面目を失うこと)や疑惑(背後から攻撃されること)に敏感になる。

第3段階は「自発性」(initiative) 対「罪悪感」(guilt) の時期で、幼児が歩行のできる段階に達して、性器に関心を持ち始める段階に入ると、「得ようとする」「ものにする」という社会的様態が加わる。男子は侵入の様式、女子は捕らえるという様式に変わる。自分が意図した自発性に強力な停止を命じるのが罪悪感であり、「去勢コンプレックス」である。道徳的責任感を徐々に発達させることができれば、責任ある社会参加を可能にする。

第4段階は「勤勉」(industry) 対「劣等感」(inferiority) の時期で、性欲を昇華して学校生活が始まる。勤勉な社会に対する希望を失うと、自分を不適格者と感じて劣等感を抱く。勤勉は一緒に仕事をするので、分業や文化の技術的精神の感覚が発達する。

第5段階は「同一性」(identity) 対「役割の混乱」(role confusion) の時期で、思春期や青年期においては、以前に信頼されていた斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) が再び問題となる。自我同一性の感覚は、これまで準備されていた内的な斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在の意味(例えば職業)の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねから生じる。この段階の危険は社会的役割の混乱である。青年期の恋愛は、自分の拡散した自我像を他人に投射することにより、それが反射されて明確になるのを見て、自己の同一性を定義づけようとする努力である。青年の心は本質的に「猶予期間」(moratorium) の心理で、児童期と成人期の間にある。

第6段階は「親密」(intimacy) 対「孤独」(isolation) の時期で、自己の同一性を他人のそれと融合させることに熱心になり、親密な関係を結ぶ準備ができるが、自我の喪失を恐れると深刻

な孤独にとらわれる。この段階で初めて真の「性器愛」(genitality)が完全に発達する。

第7段階は「生殖性」(generativity)対「停滞」(stagnation)の時期で、生殖性(世代継承性)は次の世代を確立させ、導くことに関心である。このような成熟に失敗すると、しばしば停滞感と人格的貧困感を伴うことがある。

第8段階は「自我の統合」(ego integrity)対「絶望」(despair)の時期で、以上の7段階の果実が実ることである。自我の統合は自分の唯一の人生周期(ライフサイクル)を、そうあらねばならなかったものとして、取り換えを許されないものとして受け入れることである。これは両親に対する新しい、別の種類の愛情を意味する。もし自我の統合が失われると、死の恐怖が現れ、人生の究極を受け入れることができない。

エリクソンは以上の発達段階を「漸成的図式」として示した。その対角線は心理社会的成長の標準的順序を示し、「心理社会的発達は危機的段階の解決によって前進する」という。この図は芸術家らしいコンフィギュレーションで、強い印象を与える。エリクソンの関心がフロイトの心理学的発達から心理社会的発達へと移っていることが明らかである。

なお、晩年の『ライフサイクル、その完結』(1982)では、「～対～」は葛藤から現れる「心理・社会的な強さ(徳)」を表すとした。それを図では太字で示した。このうち、希望、忠誠、世話は世代継承的サイクルに参入する資格を与えるという。

VIII 円熟期								自我統合 対 絶望 英知
VII 成人期							生殖性 対 停滞 世話	
VI 若い 成人期						親密 対 停滞 愛		
V 思春期 青年期					同一性 対 役割混乱 忠誠			
IV 潜在期				勤勉 対 劣等感 適格				
III 移動 性器期			自発性 対 罪悪感 目的					
II 筋肉 肛門期		自律 対 恥、疑惑 意志						
I 口唇 感覚期	基本的信頼 対 不信 希望							
	1	2	3	4	5	6	7	8

図. 漸成的図式 (1950、1982)

第4部はアメリカ、ドイツ、ロシアの3大国が産業革命に突入したことに関連して生じた同一性の問題を追求する。第8章は「アメリカの同一性についての省察」で、1948年以後に書かれている。アメリカの青年は、機械時代に突入して、自由を保持できるのかと問題提起する。父親が物質的な成功を追求するために家庭を放棄したことから、母親が父親の役割を引き継いだ。エリクソンの注意は、父子主義の座を奪った母親中心主義とボス制度に向く。母親中心主義は新大陸の独裁的な厳しさと結託し、ボス制度は機械と機構の独裁制と同盟を結んでいるとみる。

第9章は「ヒトラーの児童期の伝説」である。エリクソンはアメリカ政府の後援をうけて、ナチスの宣伝活動についての研究に従事した。ヒトラーの伝記からみると、ヒトラーはいかにしてすさんだ若者であったかを前面に出して国民の共感を呼び起こした。さらにドイツ人とユダヤ人とを比較して、ドイツ人が自分たちの同一性を結晶化できず、心の大きすぎるドイツ人と心の狭いドイツ人となり、矛盾を引き起こした。それに対して、ユダヤ民族はその同一性に執着する特異な例であり、新しく台頭してくる同一性にとっては危険であると感じられた。マルクス、フロイト、アインシュタインという3人は、ユダヤ人であると同時にドイツ人であったからこそ、ヨーロッパの文化的、科学的危機感をもっていたのだと分析する。

第10章は「マキシム・ゴーリキーの青年時代の伝説」で、ボルシェビキ派が描く映画「ゴーリキーの児童期」の分析である。ゴーリキーはロシアの、人民のための作家であり、レーニンの親友であった。ゴーリキーはエリクソンと同じく父親がいなく、母方祖母の家族で育てられた。ロシア革命の当時、ロシアの人口の5分の4が農民であった。ゴーリキーは自分を「インテリゲンチヤ」と呼ばれた革命家の先駆者に自分の立場を求めた。彼が求めたのは自由を与えられることではなく、対等の人間として、自由を掴む機会を与えられることであったという。

第11章は「結論 - 不安を越えて」である。エリクソンは、歴史学的方法論と心理学的方法論とを両立させるために、「心理学が歴史法則に支配されており、歴史学が心理学の法則に支配されている事実を扱うことを学ぶ必要がある」という。結論として、エリクソンは基本的ないくつかの不安と恐怖について要約する。幼児期の主要な危機が一つ一つ解決されるごとに子どもの体験する社会の健全性と文化的連帯感に基づいて、同一性の感覚は徐々に充実してくる。そのような同一性の感覚のみが人間生活における周期的なバランスを約束すると結論する。しかし、この同一性の感覚が失われると、自我の統合が絶望に、生殖性が停滞に、親密さが孤独に、同一性が混乱に屈服するところでは、幼児期の恐怖が動員されるという。

最後にエリクソンは、精神分析家の仕事について以下のように述べる。第1の次元は治療 - 研究の軸で、治療的行為を行いながら、模範的な「実験」を自由にできる。第2の次元は客観性 - 参加の軸で、観察者が自己観察的な態度でこの仕事に参加している。第3の軸は寛容 - 憤りとし、無感動な寛容や独裁的な指導よりも、もっと創造的に精神分析の精神を表現することである。寛容な精神分析家の新しい同一性と融合した多種多様な同一性が、精神分析家の分析の一部になることによって、古くさい統制を捨てて、分析家自身および患者のなかに残っている憤りを解放できる、という。

IV. 青年ルター：精神分析と歴史の研究（1958）

エリクソンは、『幼児期と社会』が発刊される3ヵ月前、1950年6月カルフォルニア大学の教授職を辞した。この時期、アメリカにはマッカーシズム（反共産主義）が広がり、大学当局が教授陣に忠誠誓約書を強制したからである。1951年、エリク、ジョアン、娘のスーの3人はカリフォルニアを引き払い、マサチューセッツ州ストックブリッジのオースティン・リッグス・センター

(Austen Riggs Center)に移った(18歳の次男ジョンはサンフランシスコに残った)。ここにはメニンガー財団から移ったロバート・ナイト(Robert Knight)が所長で、デイヴィット・ラバポート(David Rapaport, 1911 - 1960)やロイ・シェーファー(Roy Schafer)らがメニンガーから離れてここに移っていた。エリクソンのここでの仕事は臨床とその指導であった。『青年ルター』は当初、リッグス・センターの何人かの成人前期の患者について、「同一性の拡散の諸相」というタイトルの本にする予定であった。ところが、エリクソンが興味をそそる20代の患者がいて、神学校の経験があったことから、ルターの青年時代の挫折を研究することになった。1957年、エリクソンは伝統的なカトリック的文化が残るメキシコのチャパラ湖畔に移って執筆した。

本書の序でエリクソンは、マルチン・ルター(Martin Luther, 1483 - 1546)の研究について、「青年後期および成人初期における情緒的危機に関する書物として計画された」として、リッグス・センターでの「人生の危機」の研究に触れ、ルターとフロイトの類比も行うと記している。本書の副題「精神分析と歴史の研究」の意味は、精神分析を歴史研究の手段として用いることによって、歴史の一場面を再評価しようとするものである。また、「イデオロギー」という言葉は、政治的・宗教的・学問的な思想の根底に潜む無意識的傾向を意味し、集団や個人の同一性の感覚を支える世界像を創造するために、適切な時に理念に合った事実を作り出し、逆に事実に適った理念を作り出す。本書は同一性とイデオロギーに関する書物である。

第1章は「症例と事件」である。エリクソンは、同一性危機(identity crisis)の青年に対して、「自分で自分の中に見出す自己イメージと、他者から審査され期待されている自己イメージとの間に、何らかのある共通性を見出さなければならない」と述べる。青年はあるイデオロギー(世界観・価値観)によって悪化するか、それに身を投じることによって危機を克服しようとする。本書はルターの青年期の危機と、彼が思想家として、最初の詩編講義(1513年)で独創性を発揮するに至るまでの時期をみていく。20代を含めた若き日のルターを「マルチン」、後年ルター派の指導者になった彼を「ルター」と呼ぶ。

第2章は「聖歌隊での発作」をめぐる解釈である。ルターは20代中頃、エルフルト修道院の聖歌隊で突然卒倒し、取り憑かれたように、「うわごと」を言った。ドイツ語では「それは私ではない」(Ich bin's not!)、ラテン語では「私は違う(私ではない)」(Non sum!)を意味する。ルターは、1501年に17歳でエアハルト大学入学、1505年(21歳)に修士の学位を得たが、激しい落雷に由来する急性パニックによって引き起こされた請願に従い、突然、父親の許可も得ないまま退学して修道院に入る。父親は、息子が法律を学び政界へと進むことを望んでいたが、息子は深い内面的葛藤と病的な宗教的懐疑を繰り返した。1507年、マルチンは23歳で司祭になり、最初のミサを記念して祝った。この頃から「聖歌隊での発作」の原因ともなった深刻な懐疑が続いた。1512年、28歳で神学博士となり、「塔における啓示」を経験したヴィッテンベルク大学で最初の詩編講義をする。1517年(32歳)、聖歌隊の出来事から約10年後、ヴィッテンベルクの教会の扉に95箇条の提題を貼り出した。エリクソンは、聖歌隊での発作がきわめて激しい同一性危機の一部でないかと考える。この発作を神経症的徴候にみられるアンビバレンスとみて、一方で父親に対する無意識的な服従であり、他方で父親の否定であり、自分で立てた誓願「修道士になる」という確認であるとする。ルターの時代、修道院が心理社会的な「モラトリアム」であり、自分が何者であり、何者になろうとしているのか、その決定を引き延ばしておくものであった。

第3章は「服従—しかし誰に」で、幼年期・学校・修道院に入るまでが述べられる。エリクソンは、ルターに「肉親の父親に対する服従」と「天上の父親に対する服従」との葛藤があったとみる。ルターの父ハンス・ルッター(Hans Luder)は離農して鋤夫としての道を選び、その頃マルチンを身ごもっていた妻とともにアイスレーベン(ドイツ・ザクセン地方)へと移住した。

マルチンが生まれて半年後、銅と銀の鉱山のあるマンスフェルトへ引っ越した。父親は農民としての同一性を放棄し、子どもたちには新しい目標を追求するための美德を教えこもうとした。離農者の2代目であるマルチンは、先祖に対してきわめてアンビバレントな感情をもっていたとみられ、農民のイメージは「否定的同一性の断片」と呼ぶものであった。父が望んだのは、息子がラテン語を学び、大学に行き、法律家になり、できれば市長になることであった。

ハンス・ルッターは激しい気性の持ち主で、マルチンも後年の感情爆発が示すように、父の気質を受け継いでいた。鉱山で形成される労働のイデオロギーは、「鉱山では悪魔が人を苦しめ人を騙す」というもので、父は鉱山の不吉な迷信にとらわれていた。マルチンは、疑い深さ、良心の呵責、道徳的なサディズム、不潔なものにとらわれなど、強迫性の性格をもっていた。ルターの自伝から、ハンスとマルチンの関係をみると、マルチンは父を道徳的には恐れていたが、「心から父を憎むことはできなかった」、他方ハンスは息子とよい関係保つことができず、時に怒りを爆発させたとしても、「長い時間そのままにしておくことはできなかった」というものである。

ルターは典型的なエディプス・コンプレックスをもっていた症例であるが、母親については資料が多くなく、迷信に関心があったという。マルチンは両親がもつ良心のイデオロギーを受け継いだ。すなわち、父からは厳しい疑い深さを、母からは妖術の恐怖を、両者からは避けなければならない破滅や目指されるべき高い目標を受け継いだ。マルチンは親から期待されて、7歳の時に学校に通い始め、学問に重要なラテン語を学んだ。14歳の時、聖職者の町マグデブルグに通うことになったが、1年してアイゼナッハに移った。マルチンは17歳で、エアフルトの大学生となり、優等生であり続け、論争が強く「哲学者」というあだ名がつけられた。1505年2月、マルチンは17人中2番の成績で文学修士になった。これで最高の法学部で法律を勉強するという父親の夢を叶えることができる身になった。父親は息子に相応しい花嫁を探し出そうとした。4月から5月にかけて、法学部の学期が始まった頃、何かが彼の身に起こった。彼の悲しみは深く、学期の半ば、彼は休学願いを出して実家に帰った。6月末、マルチンは大学への帰途だったが、7月2日、エアハルトから数時間手前の村で凄まじい雷雨に襲われた。そのとき、彼は「聖アンナ助けたまえ、・・・私は修道士になりたいのです」と叫んだ。もちろん誰一人この運命的な言葉を聴いたわけではない。その直後に修道士になりたくはないと感じたというので、アンビバレントであったが、その経験は天からの「恐るべき召命」と考え始めた。1505年7月17日、彼はエアフルトにあるアウグスチヌス隠修士会に入会許可を願い出て、父には手紙を書いた。これはマルチンが別の父親に仕えることを意味した。ハンスはアウグスチヌス会修道院が求める1年間の修練期間を許可せず、父親らしい思いやりをすべて拒否し、母親も父親にならって息子を見捨てた。ところが、マルチンの2人の弟が死んだことより、ハンスは同意した。

第4章は「すべてか無か」(Allness or Nothingness)である。エリクソンは、マルチンの「同一性拡散」(identity diffusion)について検討する。修道院に入る前のマルチンの女性関係については何もわかっていないが、父親は息子を早く結婚させたがっていた。そうであれば、マルチンは就職と結婚という二つの課題から逃げ出したかったといえる。マルチンの志願した最も伝統的な修道院は、父親のもつ世俗的な野望とは正反対である。これまでの人生で支配的であった価値とは正反対の方向に向いた自己イメージを「否定的同一性」(negative identity)の一部分と呼ぶ。それは、その人がそうなるはいけないと警告されてきた同一性で、そこには分裂した心が伴う。こうした人は、自分は何者でもない者(nobody)のように振舞いたがる反面で、何者か(somebody)として扱われることを望む。完璧主義が目立ち、生きるか死ぬかの二者択一を迫る。ルターは修道院という共同の匿名性の中でモラトリアムを過ごし、神父マルチヌスとなった。実存的同一性(existential identity)問題が最も鮮明に現れるのは青年後期である。この時期の青

年は、自分を産み、部分的に自分を規定している両親から離れ、より広い制度の中で社会の一員になろうとするが、自分が自分の過去を選び取り、自分の将来を選んでいるという確信を持つことができない。自分で決断できない場合、両親が決定的な影響力をもつことになる。

第5章は「最初のミサと行き詰まり」で修道院生活の葛藤が取り上げられる。マルチンは父親が望むのとは逆方向の「否定的同一性」を選択し、良い修道士を求めるようになった。厳しい教化訓練があり、その中に「共同告解」があり、ひとりひとり罪を告白する。これまで馴染んでいた世界から切り離されるので、「同一性拡散」にまで至らしめるが、同時に新たな確信を生む。入会して1年後、ルターは「誓願」を許され、まもなく司祭として認められた。最初のミサに、マルチンが極度の不安に襲われ、ミサに続く晩餐の際に怒って大声をあげたという説がある。ルターは父親が自由にさせてくれないことに不満を抱いた。マルチンの神への服従は、父と和解し、父親に服従するという意味があったかもしれない。マルチンは強迫的に告解するようになり、指導者を悩ませた。1508年（25歳）、マルチンはヴィッテンベルクのアウグスチヌス会修道院に異動を命じられ、父親のような人シュタウピッツ（Staupitz）博士を知った。シュタウピッツはマルチンに教授職に勧め、1508年から1年間、マルチンは道徳哲学を講義した。1512年マルチンは神学博士となり、モラトリウムを終えた。

第6章は「本気になること」（The Meaning of “Meaning It”）である。1510年、ルターはローマに派遣されるが、ルネサンスには関心を示さない。ルネサンスは、人間に否定的良心からの休暇をもたらし、自我を解放し、多様な活動の力を蓄えさせるものであるが、ルターは生涯にわたって、「悲劇的な良心」を引き受けた。ローマから戻ると、マルチンは説教師としての経歴が情熱をもって開始され、修道士マルチンとは別人で、男らしく、ゆっくり明瞭に語った。1513年から14年の学期、彼は聖書担当講師として、「詩編」を扱った。こうした講義を用意する中で塔の啓示が生じた可能性がある。息子としてのマルチンは、自分の宗教性を父親に認めてもらうことができずに深く悩んできた。その彼が今や、子であることの苦しみを自発的に受けようとする。エリクソンは、「長く続いた息子であることが、キリストに似た者としての勝利として理解されたのである」と解釈する。

第7章は「信仰と怒り」で、宗教改革を扱う。1500年という大赦の年に、教会はサンピエトロ大聖堂を建設するというふれこみで、贖宥状（indulgence）を世界的規模で増発したが、金が私的に流用された。1517年、ルターは95箇条の提題をヴィッテンベルク城教会扉に貼り出し、ラテン語原文は大司教に届けた。ドイツ語訳は広範囲にわたって強い反響を呼び起こし、贖宥という納税の問題が多様な反乱欲望に火をつけてしまった。1年後、ルターは教皇を「反キリスト」と呼び、教皇からみたルターは「悪魔の子」であった。1520年、教皇はルターを破門し、ルターはドイツの預言者、指導者となり『キリスト者の自由』などの文書を発表した。1522年、彼はエラスムスが書いたギリシア語の聖書をドイツ語に訳した。この聖書はドイツ語で書かれた書物の最高傑作である。1525年、農民の反乱を非難する文書を発表し、ルター（45歳）は突然結婚し、牧師館に居を構えた。この結婚は父が迫ったもので、父との遅れはしたが同一化の一部となった。1526年、長男が生まれ、洗礼名をハンスとした。

自分自身が父親となったルターは、青年後期の同一性をほとんど拒否した。民衆たちは自分が所属する諸侯に服従することになり、プロテスタント革命によって、人々の生活は、職業を含めた日常的な仕事を自らの行動方針とし、教会国家によって統制されるものとなった。贖宥状に激しく抗議したルターが、西洋世界で顕著な経済的利己主義と教会との共犯関係に力を貸してしまった。エリクソンは、「マルチンは父親の階級の形而上学的弁護人になっていた」と解釈する。1527年、子どもが生まれてまもない頃、ルターは父親の期待に応え、ハンスという名の息子の

父親になった時、不安とうつに陥った。エリクソンは、青年期同一性危機の解決が部分的に失敗し、成人としての危機が悪化したとみる。これは「生殖性の危機」である。

第8章は「エピローグ」である。ルターは、教会や世俗社会の営利主義が始まった時、報酬を期待した宗教的善行と対決するために祈る人間を強調した。しかし、彼が唱えた信仰による正義は営利主義に吸収され、ついには信仰によって営利本意主義を正当化することになってしまった。ルターは祈りの中で神の子の受難と同一化しようとした。エリクソンは、ルターもフロイトも内省的な方法を葛藤に向けることによって人間の自由の余地を拡大しようとし、両者ともに「私たちの内なる子ども」という認識に達したという。ルターのライフサイクルからみられるように、人生の最初と最後の危機がともに、青年期の同一性危機の激動に集約されている。

V. ガンディーの真理：戦闘的非暴力の起源（1969）

エリクソンは1960年、『孤独な群衆』の著者デイヴィット・リースマン（David Riesman）の計らいで、大学の学位を持たなかったが、ハーバード大学の特別教授となった。この頃からエリクソンの関心はインドで、スピリチュアルな父親を求める青年の探究に関心を持っていた。ガンディー（Mohandas Gandhi, 1869-1948）のいうサティヤグラフ（真理の力）はエリクソンの語りたいテーマとなり、『ガンディーの真理』は1964年から書き始められたが、ベトナム戦争の影響がある。エリクソンは、本書について、「マハトマ・ガンディーの歴史的存在と、彼が真理と呼んだものの意味についての精神分析的な探究である」と述べる。プロローグで、ガンディーが50歳に近い時の1918年の事件、アーメダバードでの断食によるストライキが取り上げられる。

第1部が調査である。彼は歴史上最初の国をあげての市民的不服従を指導していたが、1922年のアーメダバードにおける裁判のために打ち切れ、1924年に彼は釈放されている。エリクソンが会って調査した証人たちは、ガンディーに出会ったときは20代であった。

第2部で、ガンディーの幼年時代の歩みを辿って、戦闘的非暴力（militant nonviolence）の発生の手がかりが探索される。彼の性格は非常にはにかみ屋で、引っ込み思案であり、目上の人を批判することができず、親孝行しか賞揚しないものであり、極めて若い時に結婚した。モニヤ（Moniya、幼年時代の名前）は1869年生まれ、若い母親プターリ・バー（25歳）と父親カパー・ガンディー（47歳）との最後の息子であった。家族はクジャラート州のアラビア海に面する港町ポールバンダル（注：原文はPulbandar）の大きな家に雑居していた。この地は漁師と海上貿易者の世界で、船がインド、アラビア、アフリカに往来していた。ガンディー家は商家で、カティアワール半島の内務大臣か首相を務めていた。母親は宗教的掟を遵守する宗教人であった。モーハン（Mohan）と呼ばれた少年時代、父親は極めて尊敬された人物であった。モーハダス（Mohandas、青年時代）13歳のとき、カストゥルバ（Kasturba）との婚姻が行われたが、父親が結婚式に向かう途中、馬車が転覆し大きな傷を負い、その後看病することになった。1888年（19歳）、モーハンは英国に出帆した。彼は法廷弁護士になるための勉強をして、1891年（22歳）英国から帰国し、1893年（24歳）、南アフリカへ出立し弁護士として開業した。ここでクーリー（最低の階級）扱いされ、1914年にインドに帰った。「サティヤグラハ」（satyagraha）とは、ガンディーが自分の生き方と行動方法を示すために選んだサンスクリット語で、「真理」と「力」を意味する。しかし、長い間ガンディーは、「受動的抵抗」（passive resistance）という語を用いた。エリクソンは、平和の道具として巧妙な使用を示したいときには「真理の梃子」（leverage of truth）という言葉を使う。サティヤグラハは、そもそも身体が道具の一部になる。ガンディーは、己の身体、心、魂という三重の道具を創造した。受動的抵抗の実践は、南アフリカにいるインド人を救済しようとして

始まった。

第3部は「事件」である。第1章は自伝に対する「私信」という形で、エリクソンの疑問や考えを述べている。エリクソンは暴力に代わるものは「相互性」(mutuality)であると主張している。エリクソンは、サティヤーグラハの最重要点について、ガンディーが「人間は絶対の真理を知ることはできないから罰することもできない。ゆえに真理は暴力の使用を除外する」と述べた点をとあげ、これにより日常生活が「真理の実験」になるという。精神分析的方法は他人の内的葛藤を理解する試みを伴う自己分析であるがゆえに、内なる敵に非暴力的に対決するサティヤーグラハと対をなすとみる。

第2章では、ガンディーがサティヤーグラハの最初の全面的適用の舞台として、どのようにしてアーメダバードを選んだのかについて取り上げられる。そして、なぜ彼は最初の断食を織物工業との闘争における公的問題に捧げるようになったかである。アーメダバードという都市は、経済界においても大学においても常にグジャラート語が公用語として用いられ、古代から織物のまちでもあった。ガンディーは、インドの同一性の低下として、地域言語と公用語の英語との間にある割れ目、土着工業の断絶を考えたのである。彼はやがて「紡ぎ車」を、経済的必需品、宗教的儀式、そして国家の象徴として高めていった。アーメダバードでは、カースト制度は英国的浸食を受けておらず、伝統的同一性を提供することができた。エリクソンは、全人類に共通する普遍的な精神構造をもつ、理想的な同一性を「全人類的同一性」(all-human identity)と呼ぶが、ガンディーをこの同一性を備えた人物だとみている。こうした同一性をなかなかもつことができない人類は、自己の所属する集団にとって敵であり劣っているとみる「疑似種族」(pseudospecies)を作り出す。ガンディーは、政治、経済、文化、精神における4重の災いを摘発し、真理を同一性に不可欠なものと考えた。

第3章は「協力者と敵対者」についてである。当時彼らは20代であり、エリクソンのインド滞在中の協力者にもなった。なお、インドでは、父子関係は叔父と甥、姪の関係、師弟の関係まで広がる。第4章は、アーメダバード事件の詳細が記される。1918年2月から工場がロックアウトされ、3月18日から始まった断食は、ガンディーの生涯17回企てることになる「死に至る」断食の第1回目であった。第5章の「事件の余波」で、1年後の1919年3月15日に第1回全国サティヤーグラハが起き、地域や宗教を越えて何十万のインド人が動き出したことが記される。1919年、国民会議派の党首であったネルー (Nehru) が初めてガンディー (50歳) を「偉大な魂である方」(Mahatmaji) と呼んだ。1920年、ついにマハトマは政治的指導権を握った。

第4部は「真理の梃子」である。ガンディーは中年のマハトマであり、エリクソンのいう「生殖性」「世話」という語で包含した人間の強さをもっていた。エリクソンは、「リアル」(real)という言葉について、論理的に正しいがゆえに知られることが可能なものを「事実としての真実性」(factual reality) と、行動において事実上、真実であると感じられるものを「現実性」(actuality) との2つに分けて考える。この意味で、ガンディーを「宗教的現実家」(religious actualist)と呼ぶ。ガンディーはジャイナ教徒であり、それは不殺生 (アヒンサ) の教えがあり、形象や価値の多様性を認める宗教である。ガンディーの言葉に「神があなたに現れるのは人格においてではなく、行為においてである」がある。ガンディーにとって、真理に忠実な行動とは、自分は傷つけられても相手を傷つけないという覚悟によって統制されるものであった。それは非暴力 (アヒンサ) によって統制される行動であり、相手の中の真理を尊敬することを意味した。エリクソンは、サティヤーグラハの方法から、「精神分析を、真理、自ら苦しみを引き受けること、かつ非暴力の点から見直すことができる」と締めくくる。

VI. 考察

ここでエリクソンの代表的な3部作、『幼児期と社会』『青年ルター』『ガンディーの真理』を総覧して、彼が考える精神分析について、若干の考察を試みる。

1. アイデンティティ論からライフサイクル論へ

エリクソンの人生は、父親を捜し求め続けるもので、「自分とは何者か」を問わざるを得なかった。エリクソンは32歳のときアメリカに移住し、37歳でアメリカの市民権を得るが、この時、「エリク・ホンブルガー・エリクソン」となって、父を創造し、自分をその子どもとした。人生早期の危機は青年期に、大きな危機をもたらす。エリクは20歳から27歳までが、「心理社会的モラトリアム」の時期で、芸術家になろうと遍歴する。こういう青年には、『青年ルター』にあるように、「自分で自分の中に見出す自己イメージと、他者から審査され期待されている自己イメージとの間に、何らかのある共通性を見出さなければならない」という。同一性確立には他者の期待が必要であり、他者との融合が必要であるということである。

エリクは27歳から6年間、ウィーンのプロイト家のもとで教師という職業を手にし、精神分析の世界に入ることができた。アンナ・フロイトから教育分析を受けることができ、フロイトという精神分析の父を見出すことができた。父親との確執に悩んだルターが、「長く続いた息子であることが、キリストに似た者としての勝利として理解された」というように、キリストと同様にエリクソンも「受難の子」を見出した。エリクソンからみれば、ルターもフロイトも「内なる子ども」を認識して同一性を見出したといえる。

『幼児期と社会』の第2章にある「幼児性欲理論」は、フロイトに従った古典的理論の色彩が強く、「性器性欲」が登場している。第7章になると、「人間の8つの段階」では性器性欲が消え、成人期の「生殖性」（世代継承性）として姿を変え、「ライフサイクル論」が展開されている。この間に、ダウン症のニールの誕生（1944年）が大きな影響を与えている可能性がある。子どもを産み育てる苦悩が成人期の生殖性を問うことになったと考えられる。青年期の危機を脱出したルターも「生殖性の危機」に陥っている。次に、エリクソンは『ガンディーの真理』に取り組み、ガンディーの「非暴力」から中年期の生殖性（世代継承性）の具体的な生き方と行動を学ぼうとしたと考えられる。エリクソンは非暴力の精神の中から、「精神分析を、真理、自ら苦しみを引き受けること、かつ非暴力の点から見直すことができる」という認識に至った。

エリクソンの最後の関心が「老年期」であり、これが幼児期とつながればライフサイクルは完結する。エリクソンが1960年にハーバード大学の教授になったとき、イングマール・ベルイマン (Ingmar Bergman) 監督の『野いちご』 (*Wild Strawberries*) を教材として、職業人として絶頂にある老人を襲った統合の危機について扱ったが、ライフサイクルの8段階の問題意識があったのであろう。彼の晩年の『ライフサイクル、その完結』(1982)のまえがきで、「本書の表題をアイロニカルなものとして受け取り、ひとつの完璧な生涯に関する包括的な記述が見出されるだろうなどと受け取らないことを希望する」と述べる。つまり、満足にいく完結ができなかったのである。最後の著書『老年期』(1986)は、ヘレン・キヴニック (Helen Kivnick) の助けを借りたもので、最終段階と第1段階とのつながりは強調されていない。絶望と対置される「統合感」は、「英知」という倫理的な徳 (virtue) 以上のものを意味するとエリクソンは考えた。英知について、「死そのものに向き合う中での、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」と説明しているが、エリクソンは満足できなかった。幼児期は親との信頼関係なしでは生きていけないし、老年期も家族や社会との信頼関係なしでは人生を終わることができない。徹底的に「信

頼する」心理を言葉で表現できるのであろうか。おそらくガンディーが見せた行動のように「宗教的現実性」の中に示すことができるかもしれない。

2. エリクソンの研究方法

エリクソンとフロイトとの間で、精神分析の研究方法に違いがある。フリードマン（1999）の言葉を借りれば、フロイトの「垂直性」に対して、エリクソンは「水平的」な視点をもつ。フロイトの精神分析は掘り下げる方法であり、それゆえに個人がもつ欲動やリビドーを重視し、娘のアンナ・フロイトは自我の防衛機能を重視した。他方、エリクソンは、『幼児期と社会』で、自我を「人間の経験や活動を環境に適応する行動に統合する能力を意味する概念」と定義し、「自我が社会と結ぶ関係」について関心があった。この視点は、エリクソンがアメリカに移住して文化人類学者との交流から得たものであろう。エリクソンの関心は自我の防衛ではなく、自我の発達であった。エリクソンの漸成的発達図式はそれを芸術的に呈示したものである。

『ガンディーの真理』の日本訳の序で、土居健郎は「エリクソンの最大の功績はフロイトの生物的偏向を、その根源的洞察を失わずに是正することに成功したことにあるといえよう」と述べている。エリクソンは、フロイトと違う水平指向によって、『青年ルター』でみられるように、「サイコヒストリー」（心理歴史研究）の方法で時代の「イデオロギー」（価値観・時代精神）を扱っている。エリクソンは、アイデンティティの形成にあたって、イデオロギーはきわめて重要であると認識している。土居（1971）は、イデオロギーを「一つの社会を支える思想的バックボーン」とし、日本のイデオロギーはまさに「甘え」のそれだとして、天皇制と先祖崇拜をあげる。これはそのまま日本の伝統的文化となっている。ルターの時代は、ローマ教会が支配していた封建社会から、ルネサンスを経て、近代社会へと大きく変化しようとしていた。エリクソンによれば、ルターの宗教改革は、農民であることを捨てた父親の世俗的な野望から離れようとする「否定的同一性」に志向した結果であるが、結婚することで父と同一化し、父親が求める経済的利己主義に手を貸してしまった。ルターは同一性危機の解決が部分的に失敗し、「生殖性の危機」に陥った。そこでエリクソンは、『ガンディーの真理』では文化人類学的なフィールドワークを駆使して、ガンディーの非暴力が「伝統的同一性」を利用していることを知った。このように、エリクソンがアメリカに移住して、フロイトの研究方法から大きく離れたのは明らかである。

3. エリクソンの臨床

エリクソンが心理歴史研究や文化人類学的研究にエネルギーを使ったために、彼の臨床が見えなくなったことも確かである。エリクソンが最も臨床の仕事をしたのは、オースティン・リッ格斯・センターである。エリクソンは1951年、このセンターに移り、1973年まで関与していた。ここにはロバート・ナイトやデイヴィット・ラポポートらが彼を支えた。ここで1971年にエリクソンと知り合った臨床心理学者シュライン（Schlein, 2016）が、『フェレンツィの臨床日記』のようなものをつくりたいと思い、エリクソンの臨床を発信した。

エリクソンは児童分析家として出発し、『幼児期と社会』に彼の児童分析が見える。第5章に小児統合失調症として診断された6歳のジーンが紹介されている。ジーンはエリクソンの努力もむなしく、特殊学校へ委託された。この治療は1940年代に行われ、今日では「自閉症」と診断されるであろう。シュラインはエリクソンから託された資料箱から、ジーンが書いた日付のない手紙（1950か1960年代か）を発見した。文中に、「あなた（エリクソン）の本がとても好きで、誰にも渡したくないと思えるくらい、持っているのが誇りです」「あなたは単に一人や数人を観察し治療されていたわけではなく、私たち全員、その他大勢をも気にかけてくださってい

たのですね」「まず[ジーン]一人からはじめて、そして家族全員も一緒にみていただきましたね」「[ジーン]は、今は帰宅して一緒にすんでいます。私たちがもう大丈夫と感じられるくらいに強くなっているからです」とある。彼女が長い年月エリクソンから支えられ、尊敬の念を持つことがわかる。エリクソンは第5章の最後に、「ジーンの母親は治療的な特別の努力ができる人であった。このような治療的努力は、人間的な信頼の最前線でなされるすべての試みの前提条件である」と結んでいる。エリクソンと家族の間に強い信頼関係があったのは明らかである。

『幼児期と社会』の第6章は「オモチャとその読み解き」で、エリクソンは夢と同じように、「遊びは幼児の自我を統合しようとする努力を理解する王道である」として、遊戯療法を論じる。この視点はメラニー・クラインの立場と似ている（中野, 2011）。しかし、エリクソンの立場は、遊び（プレイ）が自然な自己治療力の潜在能力をもっているとして、クラインのような解釈をしない。この章に、3歳女児メアリーの事例が記され、彼女は調子が悪くなると頑固で赤ん坊みたいになり、夜泣きや夜驚、不安発作があった。エリクソンは、子どもの遊びが「遊びの中断」から「遊びの満足」、そして「遊びの勝利」に至るサイクルを明らかにし、治療者は遊びの促進者であるという。シュラインは、1930年代、エリクソンはアンナ・フロイトとメラニー・クラインに並ぶ、児童分析のパイオニアであり、ウィニコット（D. W. Winnicott）に似ているという。ウィニコットは、自我心理学と対象関係論を統合しようとした独立学派の分析家で、子どもと母親を一つの単位として捉え、発達促進的な環境を取り入れる理論を展開した（中野, 2016）。エリクソンも成長を促進する環境に必要とされる基本的な人間関係を明確に描いた。エリクソンはリッグス・センターで行われた臨床ケースカンファレンスの積極的な参加者であり、22年間に250～300回参加している。1950～60年代の間、所長ロバート・ナイトの影響で、ここの患者の多くは「境界例」と診断された。エリクソンは、この診断名を放棄しはじめ、「アイデンティティの拡散」「役割の混乱」を含めた「アイデンティティ危機」という特徴をつけ加えた。カンファレンスでは、エリクソンは視覚芸術家のように自分の思考やアイデアを用いて自分の見方を示した。シュラインは、リッグス・センターでの逐語録からエリクソンの臨床的センスと心理療法的才能に光をあてる事例を抜粋している。

『幼児期と社会』の前書きで、エリクソンは「精神分析の方法は、H. S. サリヴァンのいう『参加者』になることは避けられないし、避けてはならない」と述べる。エリクソンは、サリヴァンのいう対人関係論的な「関与観察」技法を認めていた（中野, 2008）。エリクソン（1950）にとって、治療者は「自己観察しながらの参加者」であり、治療関係は「自分を観察することを学んだ観察者が、被観察者に自己観察的になることを教える人間関係である」という。エリクソンはカウチよりも対面に置いた「ゆったりとした椅子」を好むようになった。エリクソン（1964）の臨床は、ウィニコットやサリヴァンと親和性がある。エリクソンは最後にアメリカ人の精神分析家になったとあってよいだろう。

文献

- 1) 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造. 弘文堂.
- 2) Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. W. W. Norton & Co, Inc. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1. 仁科弥生 (訳) (1980). 幼児期と社会 2. みすず書房.
- 3) Erikson, E.H. (1958). *Young Man Luther. A Study in Psychoanalysis and History*. W. W. Norton & Co, New York. 西平直 (訳) (2002, 2003). 青年ルター 1, 2. みすず書房.
- 4) Erikson, E.H. (1959). *Psychological Issues: Identity and The Life Cycle*. International

- Universities Press. 小此木啓吾（編訳）(1973). 自我同一性. 誠信書房.
- 5) Erikson, E.H.(1964). *Insight and Responsibility*. W. W. Norton & Co, New York. 鑓幹八郎（訳）(1971). 洞察と責任:精神分析の臨床と倫理. 誠心書房
 - 6) Erikson, E.H.(1968). *Identity: Youth and Crisis*. W. W. Norton & Co, New York. 岩瀬庸理（訳）(1973). アイデンティティ:青年と危機. 金沢文庫.
 - 7) Erikson, E.H. (1969). *Gandhi's Truth : On the Origins of Militant Nonviolence*. W. W. Norton & Co, New York. 星野美賀子（訳）(1973,1974). ガンディーの真理 1, 2. みすず書房.
 - 8) Erikson, E.H. (1977). *Toys and Reasons: Stages in the Ritualization in Experiences*. W. W. Norton & Co, New York. 近藤邦夫（訳）(1981). 玩具と理性 経験の儀式化の諸段階. みすず書房.
 - 9) Erikson, E.H. (1974). *Dimensions of A New Identity: The 1973 Jefferson Lectures in the Humanities*. W. W. Norton & Co, New York. 五十嵐武士（訳）(1979). 歴史のなかのアイデンティティ. みすず書房.
 - 10) Erikson, E.H. (1982). *The Life Cycle Completed : A Review*. W. W. Norton & Co, New York. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）(1989). ライフサイクル、その完結. みすず書房.
 - 11) Erikson, E.H., Erikson J., Kivnick, H. (1986) . *Vital Involvement in Old Age*. W. W. Norton & Co, New York. 朝永正徳・朝永李枝子（訳）(1990). 老年期:生き生きしたかわりあい. みすず書房.
 - 12) Friedman, L. (1999). *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts. やまだようこ・西平直（監訳）鈴木真理子・三宅真季子（訳）(2003). エリクソンの人生 アイデンティティの探究者. 新曜社.
 - 13) 中野明德（2008）. H.S.サリヴァンの精神医学的面接論—関与的観察の方法. 福島大学総合教育研究センター紀要, 5, 1-8.
 - 14) 中野明德（2011）. メラニー・クラインの児童精神分析—遊戯技法の開拓. 福島大学心理臨床研究, 5, 1-10.
 - 15) 中野明德（2016）. D・W・ウィニコットの情緒発達理論と精神分析. 別府大学大学院紀要, 21, 41-61.
 - 16) Schlein, S. (2016). *The Clinical Erick Erikson: A Psychoanalytic Method of Engagement and Activation*. Routledge. 鑓幹八郎・松木寿弥（訳）(2018). クリニカル・エリクソン—その精神分析の方法:治療的関わりと活性化. 誠信書房.
 - 17) 鑓幹八郎（2018）. エリクソン—その生涯とライフサイクル論. 大阪精神分析セミナー運営委員会編:連続講義 精神分析家の生涯と理論. 岩崎学術出版社. pp71-104.